



第34回 日本神経理学療法学会 サテライトカンファレンスいわて

多様化する 脊髄障害の現在地

The Current Landscape of Diversifying Spinal Cord Disorders

抄録・プログラム集

会 期 2025 年 9 月 14 日

集会長 関 公輔（いわてリハビリテーションセンター）

会 場 いわて県民情報交流センターアイーナ（対面）＋オンライン（ZOOM ウェビナー）

開 催 一般社団法人日本神経理学療法学会



多様化する脊髄障害の現在地

- 不全脊髄障害に必要な標準的神経理学療法とは -

いわてリハビリテーションセンター
関 公輔

開催趣旨

脊髄障害に対する理学療法は、歴史的には傷痍軍人の社会復帰を目指すリハビリテーションとして始まった。我が国においては、高度経済成長期の二次・三次産業の急激な発展に伴い、労働災害や事故による脊髄損傷者が急増し、社会問題化した経緯がある。その結果、専門病院の設置、診療報酬の整備、障がい者支援のための法整備など、リハビリテーション支援の体系化が進められ、理学療法の役割も明確に位置づけられた。

しかし、その後の労働安全管理体制の確立、労働条件の改善、二次産業の縮小とともに、完全損傷者は大きく減少している。一方で、現在は人口動態の劇的な変化により、少子高齢化が加速し、平均寿命の延伸や労働人口の高齢化に伴い、高齢者の社会参加がますます一般化している。また医療診断技術の発展により詳細な脊髄疾患の診断が可能となったことから、原因究明が不十分であった障害像を詳細に捉えることができる時代を迎えた。

このような社会的背景や医療技術の進展に伴い、理学療法の現場では、かつて主流であった完全損傷よりも不全損傷例が増え、多様化した脊髄疾患、高齢者特有の脊髄障害が増加している。具体的には、腰部圧迫骨折に伴う神経症状、腰部脊椎管狭窄症や頸髄症、脊髄腫瘍や脊髄梗塞、脊髄炎による歩行障害など多岐にわたり、多くの理学療法士が日々これらの症例に直面しているのが現状である。

他方、我々理学療法士の教育や臨床研修を振り返ると、脊髄損傷の理学療法においては完全損傷が象徴的に理解され、現代における多様な脊髄障害の臨床像に適した評価や治療体系は、いまだ個別の経験や理解に留まっている側面がある。標準的な神経理学療法の確立が、現代の脊髄障害に対応するためには不可欠となっている。

こうした現状を踏まえ、本サテライトカンファレンスでは、従来の脊髄損傷の理学療法をブラッシュアップし、これから地域社会で直面するであろう多様な脊髄障害に対し、問題点を共有し、最新の知見を取り入れた標準的評価と実践方法を共有する機会としたい。

そして、参加者それぞれが神経理学療法を実践する専門家として、広い見識を持ち、日々の臨床現場に直接役立つ知識と技術を高める一助となることを目的として開催するものである。多様化する脊髄障害の「現在地」を確認し、これからの神経理学療法の方向性を共に考える場となれば幸いである。

略歴

1998年岩手リハビリテーション学院を卒業し、同年理学療法士免許取得。社団医療法人巖心会栃内病院に入職。2006年公益財団法人いわてリハビリテーションセンターに入職し現在に至る。専門理学療法士（基礎・運動器・スポーツ）、認定理学療法士（脳卒中）。青森県立保健大学臨地教授。（一社）日本神経理学療法学会いわて地方会代表。（一社）日本リハビリテーション病院・施設協会障害児・者支援検討委員会委員。（一社）岩手県理学療法士会常務理事兼組織強化部長。いわて JRAT 事務局長。

目 次

・ 集会長挨拶	1
・ 目次	2
・ 会場周辺図	3
・ 会場アクセス	4
・ 会場案内図	5
・ サテライトカンファレンス日程表	6
・ ご参加の皆様へ（対面参加）	7
・ ご参加の皆様へ（web 参加）	9
・ 新生涯学習制度におけるポイント・点数取得	10
・ サテライトカンファレンスプログラム	11
・ 抄録集	13

会場周辺図



いわて県民情報交流センター（アイーナ）

〒020-0045

岩手県盛岡市盛岡駅西通1丁目7番1号

Tel 019-606-1717

（会場アクセス：URL）

<https://www.aiina.jp/soshiki/2/21.html>

（Google map：QRコード）



会場アクセス

- ・ 駐車場ご利用の場合
 - ・ 盛岡駅西口地区駐車場（市営：448 台）
 - ・ 盛岡市盛岡駅西通一丁目 1 番 5 号（アイーナ東側向かい）
 - この他、マリオス立体駐車場（市営：297 台）



- ・ 新幹線ご利用の場合

東京駅 ➡ 盛岡駅 ➡ いわて県民情報交流センター アイーナ
(130 分) (徒歩 4 分)

- ・ 飛行機をご利用の場合

いわて花巻空港 ➡ 花巻空港駅 ➡ 盛岡駅 ➡ いわて県民情報交流センター アイーナ
(車 7 分) (JR 東北本線 34 分) (徒歩 4 分)

いわて花巻空港 ➡ 盛岡駅 ➡ いわて県民情報交流センター アイーナ
(アクセスバス 45 分) (徒歩 4 分)

会場案内図



803 会議室入り口図



サテライトカンファレンス日程表

9時	30	開場, 受付
	40	
	50	
10時	00	開会の挨拶 オープニング・リマーク 10時00分～10時20分
	10	「脊髄障害に対する理学療法の変遷とこれから」
	20	集会長 関 公輔(いわてリハビリテーションセンター)
	20	休憩
	30	基調講演 10時25分～11時15分
	40	「脊髄障害に対する理学療法のパラダイムシフト」 —不全損傷時代の評価と介入—
11時	50	講師 水上昌文(茨城県立医療大学)
	00	座長 関 公輔(いわてリハビリテーションセンター)
	10	
	20	教育講演①(評価と予後) 11時20分～12時10分
	30	「脊髄障害における評価戦略と予後予測のポイント」
	40	講師 佐藤 弘樹(岩手県立中央病院)
12時	50	座長 高橋 和夫(栃内第二病院)
	00	
	10	
	20	
	30	昼休憩 12時10分～13時00分
	40	
13時	50	
	00	教育講演②(臨床実践) 13時00分～13時50分
	10	「現代的脊髄障害への理学療法アプローチ」 —多様化する不全損傷・脊椎疾患の具体的対応—
	20	講師 藤縄 光留(神奈川リハビリテーション病院)
	30	座長 佐藤 弘樹(岩手県立中央病院)
	40	
14時	50	
	00	実践報告 13時55分～14時55分
	10	「急性期における不全脊髄障害の臨床的課題と対応策」
	20	発表者 佐藤 剛介(奈良県総合医療センター)
	30	「回復期における不全脊髄障害の理学療法実践—現場からの報告—」
	40	発表者 宮下 創(森ノ宮医療大学)
15時	50	座長 吉川 憲一(茨城県立医療大学付属病院)
	00	総合討論 15時00分～16時10分
	10	「地域で直面する不全脊髄障害に対し 神経理学療法を提供するためのあるべき姿とは」
	20	シンポジスト 水上 昌文(茨城県立医療大学)
	30	藤縄 光留(神奈川リハビリテーション病院)
	40	吉川 憲一(茨城県立医療大学付属病院)
16時	50	佐藤 剛介(奈良県総合医療センター)
	00	宮下 創(森ノ宮医療大学)
	10	司 会 関 公輔(いわてリハビリテーションセンター)
		佐藤 弘樹(岩手県立中央病院)
	00	閉会の挨拶 16時10分
	10	準備委員長 佐藤 弘樹(岩手県立中央病院)

ご参加の皆様へ（対面参加）

1. 開催概要

- ・ 集 会 長：関 公輔（いわてリハビリテーションセンター）
- ・ 開催日時：令和7年9月14日（日）
- ・ 開催方法：ハイブリッド開催（対面+ZOOM ウェビナー）
- ・ 対面会場：いわて県民情報交流センター「アイーナ」

2. 参加費

本会会員（専門・一般）	3,000 円
本会非会員（協会会員）	3,000 円
学 生 会 員	550 円
非 協 会 員 ・ 他 職 種	4,400 円

3. 参加受付

- ・ 803 会議室前の廊下に受付がございます。受付開始は、当日 9 時 30 分からとなっております。
- ・ 受付方法は、「※JPTA アプリの使用」または「参加登録用紙へ必要事項の記入」の 2 種類となっております。
- ・ 参加受付を済まされた後、記入台にてネームカードにお名前と御所属をご記入の上、会場内ではネームホルダーの着用をお願いいたします。また、講師、座長はこの他にそれぞれの受付もがございますのでご注意ください。

【本会会員（専門・一般）及び講師・座長の方】

受付方法：JPTA アプリの使用

受付場所：受付①

【本会非会員（協会会員）】

受付方法：JPTA アプリの使用

受付場所：受付②

【学生会員の方】

受付方法：参加登録用紙へ必要事項の記入

受付場所：受付③

【非協会員・他職種の方】

受付方法：参加登録用紙へ必要事項の記入

受付場所：受付④

※JPTA アプリを使用した受付について

- 1) 来場前に JPTA アプリのインストールをお願いいたします。



- 2) マイページにログインするときにログイン ID とパスワードが改めて必要になる場合がございます。

- 3) 受付にて QR コードを提示いたしますので、JPTA アプリの『QR コード読み取り』をしてください（下図を参照）。



4. 抄録集

- ・ 冊子での無料配布は行いません。ご了承ください。
- ・ 日本神経理学療法学会のホームページよりダウンロードが可能です。

5. 昼食について

- ・ カンファレンス会場内は飲食可能です。
- ・ 会場一階のコンビニエンスストア、食事店のご利用も可能です。

6. その他

- ・ 会場内にクロークはございません。
- ・ 会場内では、携帯電話・スマートフォンの電源を切るかマナーモードへの設定をお願いいたします。
- ・ 本会内容のカメラ・ビデオ撮影・録音・スクリーンショットなどは講演者や発表者の著作権保護や対象者プライバシー保護のため固くお断りいたします。

ご参加の皆様へ（web 参加）

1. WEB での当日参加方法

本サテライトカンファレンスは、Zoom ウェビナーで行います。接続用 URL, ID, パスワードはオンライン参加者にメールでお知らせします。円滑な進行とセキュリティ確保のため以下の注意事項をご確認ください。

2. 事前準備について

- ・ サテライトカンファレンス開催日前に Zoom アプリの最新版がインストールされていることをご確認ください。
- ・ インターネット接続が安定している環境でご参加ください。
- ・ 本ウェビナーの参加用 URL や ID, パスワードは第三者と共有しないでください。

3. 入室について

- ・ 開始 30 分前の 9 時 30 分から入室可能です。
- ・ 開始 10 分前（9 時 50 分）にはご入室していただき、接続状況をご確認ください。
- ・ Zoom に参加する際は、本人確認のため、氏名入力欄に「会員番号（理学療法士以外は職種）、氏名、所属」を設定し入室ください。
- ・ 本ウェビナーの録画、スクリーンショット、録音は禁止です。

4. 質疑応答について

- ・ 講演内容について、講演終了後に質問を受け付けます。
- ・ 質問の採否は司会や座長に一任となりますのでご了承ください。
- ・ 講演内容に関するご質問は、「Q&A 機能」でコメント入力してください。
- ・ 当日の進行状況に合わせ、回答のタイミングや方法を柔軟に調整させていただきますことをご容赦願います。

5. 通信環境

通信環境について、インターネット接続は有線 LAN を推奨します。無線接続（Wi-Fi など）の場合やインターネット速度が低下した環境で接続している場合、接続が不安定になり、映像や音声に影響が出る場合がございます。通信環境不良による責任は負いかねます。

※ 開演以降の問い合わせは、Zoom ウェビナーのチャット機能で “事務局” 宛にご連絡下さい。

新生涯学習制度におけるポイント・点数取得

第 34 回日本神経理学療法学会サテライトカンファレンス岩手では、「学会参加」として、以下 2 つの履修目的でのポイント取得が対象であり、事前・当日登録時に 1 つ選択していただきます。参加登録の検討にご活用ください。なお、事前参加登録時、または当日参加登録時に一度選択したものについては、変更できかねますので、ご確認の上、登録をお願いいたします。

生涯学習

- ・ 登録理学療法士更新ポイント 5
- ・ 認定/専門理学療法士更新点数 5
(区分 6 カリキュラムコード 80「脊髄損傷の理学療法」)

※当日は、協会アプリを使用した QR コードによる受付を行います。事前にダウンロードをお願いいたします。

※前期研修・後期研修履修中の会員の皆様は、登録理学療法士更新を選択し、申し込みをお願いいたします。

※本サテライトカンファレンスは生涯学習ポイント対象事業ですが、マイページのシステム変更の事情により事前参加登録時にはポイント申請ができない状態となっておりますことをご了承ください。

お申込み完了後に、改めてポイント申請手続きのご案内及び確認・対応を行います。

【生涯学習制度に関するお問い合わせ先】

(お問い合わせ先) 日本神経理学療法学会 岩手地方会

(担 当) 佐藤 弘樹 (岩手県立中央病院)

(E - M a i l) jsnpt.iwate@gmail.com

サテライトカンファレンスプログラム

10 時 00 分～10 時 20 分 開会の挨拶 オープニングリマーク

「脊髄障害に対する理学療法の変遷とこれから」

集会長 関 公輔 (いわてリハビリテーションセンター)

10 時 25 分～11 時 15 分 基調講演

「脊髄障害に対する理学療法のパラダイムシフト-不全損傷時代の評価と介入-」

講師 水上 昌文 (茨城県立医療大学)

座長 関 公輔 (いわてリハビリテーションセンター)

11 時 20 分～12 時 10 分 教育講演① 「評価と予後」

「脊髄障害に対する評価戦略と予後予測のポイント」

講師 佐藤 弘樹 (岩手県立中央病院)

座長 高橋 和大 (栃内第二病院)

13 時 00 分～13 時 50 分 教育講演② 「臨床実践」

「現代的脊髄障害への理学療法アプローチ-多様化する不全損傷・脊椎疾患の具体的対応-」

講師 藤縄 光留 (神奈川リハビリテーション病院)

座長 佐藤 弘樹 (岩手県立中央病院)

13 時 55 分～14 時 55 分 実践報告

「急性期における不全脊髄障害の臨床的課題と対応策」

講師 佐藤 剛介 (奈良県総合医療センター)

「回復期における不全脊髄障害の理学療法実践—現場からの報告—」

講師 宮下 創 (森ノ宮医療大学)

座長 吉川 憲一 (茨城県立医療大学付属病院)

15 時 00 分～16 時 10 分 総合討論

「地域で直面する不全脊髄障害に対し神経理学療法を提供するためのあるべき姿とは」

シンポジスト 水上 昌文（茨城県立医療大学）

藤縄 光留（神奈川リハビリテーション病院）

吉川 憲一（茨城県立医療大学付属病院）

佐藤 剛介（奈良県総合医療センター）

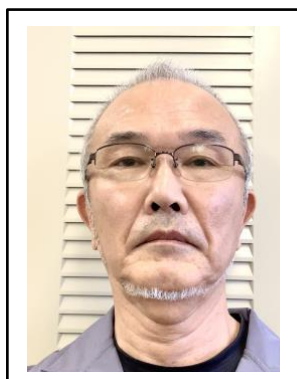
宮下 創（森ノ宮医療大学）

司会 関 公輔（いわてリハビリテーションセンター）

佐藤 弘樹（岩手県立中央病院）

16 時 10 分～16 時 15 分 閉会の挨拶

準備委員長 佐藤 弘樹（岩手県立中央病院）



基調講演

脊髄障害に対する理学療法のパラダイムシフト ー不全損傷時代の評価と介入ー

茨城県立医療大学
水上 昌文

講演概要

現在の脊髄損傷のリハビリテーション・理学療法は、1944年に設立された英国国立脊髄損傷センター（ストック・マンデビル病院）の初代院長であるグッドマン博士により体系づけられた。医師のみでなく、PT・OT・NSによる急性期からの排痰チーム、呼吸管理チーム、褥瘡管理チーム、導尿管理など、先進的なチーム医療が行われ、世界各国からの研修生が、同病院から帰国後にこれを自国で普及させることで現在の脊損リハの体系に至っている。このように脊損リハは、大戦の犠牲者に対応する形で進化して来たものであり、高エネルギー型損傷に伴う完全麻痺が中心であった。

我が国においても、戦後の高度経済成長期、モータリゼーションの発展期を中心に、当初は完全麻痺の比率が高かった。しかし、高齢社会の到来、自動車安全技術の進化、労働安全環境の整備が進み、高エネルギー型損傷を中心とする完全麻痺の比率は低下し、高齢者の転倒を中心とする低エネルギー型損傷による不全麻痺の比率が圧倒的に増大しているのが現状である。

更に骨髄間葉系幹細胞、iPS細胞、肝細胞増殖因子などによる再生医療が実用段階に入りつつある。これらの再生医療により、運動完全麻痺（AIS:A,B）の多くはAIS:C,Dへ移行して行くことが一般的になってくることが見込まれる。

このような背景から、脊髄損傷の理学療法は、「残存機能を最大限に生かした車いすを用いたADL自立」から、「麻痺の改善、歩行能力の向上」が主眼となって来る。

現在の医療制度の下では、脊損リハも「回復期リハビリテーション病棟」が中心となっており、限られた時間の中で高い治療効果を求められている。そのためには、国際標準神経学的評価法を用い、これらのデータより開発されている予後予測法を用いた早期の正確な予後予測、ロボット技術を用いた新たな介入も選択肢の一つとして取り組んでゆく必要がある。

略歴

1982年 東京衛生学園専門学校リハビリテーション学科卒
1998年 筑波大学大学院リハビリテーションコース修了
1999年 博士の学位授与（筑波大学）

1982年 国立身体障害者リハビリテーションセンター病院第1機能回復訓練部
1997年 茨城県立医療大学 保健医療学部 理学療法学科 講師
2001年 同 及び大学院 助教授
2004年 同 教授（現在に至る）
2009年 同 理学療法学科長
2013年 同 大学院 研究科長
2017年 同 副学長
2021年 同 学長特別補佐（2024年まで）



教育講演①

脊髄障害における評価戦略と予後予測のポイント

岩手県立中央病院
佐藤 弘樹

講演概要

近年、脊髄損傷医療の対象は、従来の若年完全麻痺者から、高齢者を中心とした不全四肢麻痺者へとシフトしてきている。この変化に伴い、リハビリテーションの目的や介入戦略にも大きな転換が求められている。完全麻痺者に対するリハビリテーションでは、ADL (Activities of Daily Living) 拡大に向けた代償動作の習得が主たる目的となり、非麻痺域の運動機能やバランス能力への介入が重要視されてきた。一方で、不全四肢麻痺者に対しては自立歩行の獲得が主たる目標となり、麻痺域である下肢・体幹の運動機能の回復を促す介入が中心となる。

とりわけ、不全四肢麻痺者に対しては、脊髄の可塑性を中心とした中枢神経機能の回復を促す戦略が必要とされ、身体機能の回復可能性を見極める「予後予測」が不可欠となる。脊髄損傷者の神経学的評価としては、ISNCSCI (International Standards for Neurological Classification of Spinal Cord Injury) が国際的に広く用いられている。ISNCSCI は、運動・感覚スコアに基づき神経学的損傷高位や麻痺の重症度を定量的に表現することが可能であり、自立歩行獲得の可能性や、ADL 能力の予後予測に有効である。

本講演では、ISNCSCI の方法について概説し、本邦の医療制度と照らし合わせ、急性期における評価の重要性や、予後予測の結果を施設間で共有する意義について述べながら、今後の脊髄損傷医療のあり方を展望する。

略歴

[学歴]

2013 年 3 月 弘前大学医学部保健学科 卒業
2021 年 3 月 茨城県立医療大学大学院保健医療科学研究科 博士前期課程 修了
2023 年 9 月 茨城県立医療大学大学院保健医療科学研究科 博士後期課程 修了

[職歴]

2013 年 4 月 公益財団法人いわてリハビリテーションセンター
2019 年 4 月 茨城県立医療大学付属病院
2022 年 4 月 岩手県立中央病院

[活動]

2022 年 3 月 脊髄損傷理学療法研究会 幹事
2024 年 2 月 一般社団法人日本神経理学療法学会 広報委員
2025 年 7 月 一般社団法人日本神経理学療法学会 評議員



教育講演②

現代的脊髄障害への理学療法アプローチ ー多様化する不全損傷・脊椎疾患の具体的対応ー

神奈川県総合リハビリテーションセンター 理学療法科科长
藤縄 光留

講演概要

近年の脊髄障害は、従来イメージされる「完全損傷」ではなく、高齢化や脊柱管狭窄・後縦靱帯骨化症などの脊椎疾患を背景とした「不全損傷」が多くなっている。障害像は多様で重症度によっては AIS 分類 B～E まで幅があり、神経学的高位や脊髄横断面の損傷部位、合併症の有無などによっても機能障害が異なる。

不全損傷の理学療法アプローチは、「完全損傷」に近い状況であれば失われた機能に代わる「代償運動の獲得」が主体になるが、体幹や下肢が機能する場合は立位・歩行の獲得を視野にしたアプローチが主体になる。立位・歩行を視野にしたアプローチでは、体幹や股・膝・足関節による支持バランス戦略の評価介入を行い、起居動作による姿勢運動制御の再獲得を図る。また重症度に応じて電気治療や歩行補助機器（装具～ロボティクス）を活用する。ADL では上肢機能への介入も必要であるが、不全損傷に伴う問題として上肢の痛みや痺れがある。これは国際疼痛学会（1994）で複合性局所痛症候群（CRPS : Complex Regional Pain Syndrome）の可能性が指摘されており、介入に難渋することがある。対応の糸口として、甲骨アライメント評価や肩甲帯 stabilize の介入方法を示す。また、高齢化の問題として、呼吸器やせん妄などの合併症を伴うことがあり、サルコペニアやフレイルといった老年医学的問題を有することも多い。これらに対しては早期より離床を促し機能改善に努める必要がある。また、予後予測や目標設定が難しく、ADL 未完のまま退院になることなどがある。原疾患の脊椎疾患への医学的管理も含め、機能状態に応じて社会資源の活用や多職種連携が不可欠である。

脊髄障害は多様化し、画一的なアプローチでは限界があり、評価に基づく個別対応に加えチーム医療が鍵となる。理学療法士は専門性を活かし、機能再建と機能代償の両面から支援し、生活期を見据えて関わるのが重要である。講演当日は症例映像も交えて上記内容を解説する。

略歴

1990 年 国立療養所犀潟病院附属犀潟リハビリテーション学院 卒業

1990 年～ 神奈川県総合リハビリテーションセンター 入職

2010 年～ 専門理学療法士（神経系）

2013 年～ 認定理学療法士（脊髄障害）

2015～2023 年 脊髄損傷理学療法研究会 会長

2016 年～ 北里大学医療衛生学部 非常勤教員

代表的著書

編集：「PTOT のための脊髄損傷アプローチ～臨床経過に基づく介入～」メジカルビュー2022

共著：「脊髄損傷リハビリテーションマニュアル第3版」医学書院2019

共著：「脊髄損傷理学療法マニュアル第3版」文光堂2020

執筆：「不全型脊髄損傷者の歩行再建と理学療法」理学療法ジャーナル2009

など



実践報告

急性期不全脊髄障害の臨床的課題と対応策

奈良県総合医療センター
佐藤 剛介

講演概要

近年、外傷性脊髄障害の疫学は大きく変化している。1990年代の疫学調査では、20歳代と60歳代にピークを持つ二峰性の受傷時年齢分布が示されていたが、現在は70歳代を中心とする一峰性へと移行し、年間の新規発生者数も微増傾向にある。この高齢化に伴い受傷機転も変化し、特に高齢者では交通事故よりも転倒・転落による受傷が増加しており、不全脊髄障害の割合も高まっている。また、心臓血管手術後の合併症による脊髄梗塞など、非外傷性脊髄障害も増加傾向にある。

こうした状況の中で、理学療法士の養成課程では、完全脊髄障害（完全損傷）に対する理学療法が教育の中心であった。しかし、現在多数を占める不全脊髄障害に対する体系的な教育機会や評価・介入法の整備は、養成課程および卒後教育の双方において依然として限定的である。不全脊髄障害は障害の程度が多岐にわたるため、病態解釈やリハビリテーションゴールの設定は難易度が高い。

さらに、医師や看護師の異動が頻繁な急性期病院においては、脊髄障害リハビリテーションに関する知識や技術の継承が困難であり、その結果、長期的な生活再建を見据えたリハビリテーション計画が十分に立案されない事例も散見される。本来、リハビリテーション密度を高めるべき時期に適切な介入や十分な介入時間が確保できず、特に転院までの待機期間が長期化した場合、廃用症候群を招くリスクが増大し、適切な対応が求められる。

本講演では、急性期における不全脊髄障害患者に対する理学療法の課題を整理し、現場で実践可能な対策を提案する。具体的には、標準的な評価・介入手法の構築、多職種連携による実践知の蓄積、リハビリテーション機器の整備促進、そして病態理解を深めるための院内教育体制の充実などが挙げられる。加えて、不全脊髄障害患者の個別性を踏まえた介入の重要性と、医療施設間における円滑な情報共有を通じた最適な医療の実現についても、その視点を提示する。

略歴

（学歴）

- 2002年 行岡リハビリテーション専門学校卒業
- 2011年 畿央大学大学院 健康科学研究科 修士課程修了
- 2017年 畿央大学大学院 健康科学研究科 博士後期課程修了

（職歴）

- 2002年 奈良県総合リハビリテーションセンター 勤務
- 2017年 畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター 客員研究員
- 2019年 奈良県総合医療センター 勤務
- 2021年 畿央大学大学院 客員准教授
- 2025年 畿央大学大学院 客員教授

（活動）

- 2022年 日本ペインリハビリテーション学会 理事
- 2023年 脊髄損傷理学療法研究会 副会長
- 2023年 日本神経理学療法学会タスクフォース（中枢性疼痛班） 班長
- 2024年 日本神経理学療法学会 理事



実践報告

回復期における不全脊髄障害の理学療法実践 ー現場からの報告ー

森ノ宮医療大学総合リハビリテーション学部理学療法学科
宮下 創

講演概要

回復期リハビリテーションにおける脊髄損傷者への介入は、診療報酬制度上の制約がある中で、身体機能の改善に加え、退院後の生活を見据えた包括的な支援が不可欠である。特に高齢化が進む現代においては、地域生活を見据えた理学療法の実践が、患者の生活の質や医療・介護支援の継続性に大きな影響を及ぼす。

本講演の前半では、近年増加傾向にある高齢頸髄不全損傷者に対する生活期への連携に関する実践を紹介する。多職種連携による住環境調整や介護サービスとの連携など、入院中の生活様式を地域生活へと円滑に移行させるために、回復期において実施される退院支援の果たす役割について、具体的な事例を交えて報告する。

後半では、脊髄損傷に専門性を有する医療機関と連携しながら、地域内で自律的に機能している「地域ユニット」としての支援体制について紹介する。この体制は、制度上明確に位置づけられているものではないが、臨床現場においては、非公式ながら実質的に機能するこのような連携体制が、専門性の維持と退院支援の質を支える上で不可欠であると認識している。ここでは不全脊髄障害例に加え、若年頸髄完全損傷例や、回復期単独では退院支援が困難な症例における取り組みを通じ、地域ユニットの具体的な役割とその課題について報告する。

今後、頸髄損傷者の高齢化が進む中で、専門的な支援を要する症例への医療資源の制約は、現場にとって喫緊の課題である。こうした背景を踏まえ、本講演では、専門性の継続と地域における実践の質をいかに担保していくかについて、現場の視点から提言を行う。

本報告が、回復期に携わる理学療法士にとって、生活期リハビリテーションへの円滑な移行を支える「つなぐ視点」を再考する契機となれば幸いである。

略歴

2007年3月 中京大学 体育学部 健康科学科 卒業
2011年3月 中部リハビリテーション専門学校 卒業
2011年4月 社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団 兵庫県立総合リハビリテーションセンター
2014年4月 独立行政法人 地域医療機能推進機構 星ヶ丘医療センター
2020年3月 森ノ宮医療大学大学院 保健医療学研究科 保健医療学専攻 博士前期課程 修了
2025年5月 森ノ宮医療大学 総合リハビリテーション学部 理学療法学科（現在に至る）

第 34 回日本神経理学療法学会サテライトカンファレンス岩手
プログラム・抄録集

【編集責任者】

第 34 回日本神経理学療法学会サテライトカンファレンスいわて
集会長 関 公輔

【準備委員会】

集 会 長： 関 公 輔（いわてリハビリテーションセンター）
準 備 委 員 長： 佐 藤 弘 樹（岩手県立中央病院）
準 備 委 員： 佐 藤 佑 樹（岩手済生会病院）
高 橋 和 大（栃内第二病院）
高 山 僚 平（いわてリハビリテーションセンター）
袖 林 龍太郎（荻野病院）
江 口 舞 人（いわてリハビリテーションセンター）
五 戸 晋太郎（宮古第一病院）
三 浦 優 人（東八幡平病院）

【運営スタッフ】

塚 目 司（リードコナン）
小 澤 齊（岩手県立中央病院）

【大会事務局】

日本神経理学療法学会 岩手地方会

【抄録編集】

第 34 回日本神経理学療法学会サテライトカンファレンス岩手
準備委員長 佐藤 弘樹